

「パウロ、ユダヤ人たちに会う」

2016年10月17日

使徒言行録 28章 17節～22節 三日の後、パウロはおもだったユダヤ人たちを招いた。彼らが集まって来たとき、こう言った。「兄弟たち、わたしは、民に対しても先祖の慣習に対しても、背くようなことは何一つしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に引き渡されてしまいました。ローマ人はわたしを取り調べたのですが、死刑に相当する理由が何も無かったので、釈放しようと思ったのです。しかし、ユダヤ人たちが反対したので、わたしは皇帝に上訴せざるをえませんでした。これは、決して同胞を告発するためではありません。だからこそ、お会いして話し合いたいと、あなたがたにお願いしたのです。イスラエルが希望していることのために、わたしはこのように鎖でつながれているのです。」すると、ユダヤ人たちが言った。「私どもは、あなたのことについてユダヤから何の書面も受け取ってはおりませんし、また、ここに来た兄弟のだれ一人として、あなたについて何か悪いことを報告したことも、話したこともありませんでした。あなたの考えておられることを、直接お聞きしたい。この分派については、至るところで反対があることを耳にしているのです。」

パウロはローマ皇帝に上訴し、百人隊長ユリウスに護送され、地中海の嵐を乗り切り、ようやくローマにたどり着いた。ローマでは、一人の番兵がただだけで、自分で住むことが許される軟禁状態に置かれた。

パウロは、ローマに在住するユダヤ人社会の主だった人々を招いた。集まったユダヤ人たちに、「兄弟たち」と呼びかけ、下記のように語った。私はユダヤ人の同胞に対しても、先祖の慣習に対しても、背くようなことは何一つしていない。しかし、エルサレムで囚人として、ローマ人の手に渡されてしまった。ローマ人は私を取り調べたが、死刑に相当する理由がなかったので釈放しようとした。ところが、ユダヤ人たちは釈放に反対したので、皇帝に上訴せざるを得なかった。皇帝への上訴は同胞を告発するものではない。だからこそ、あなた方にお会いし、私の無罪を理解してもらいたいと来てもらったのである。私は、イスラエルが希望していることのために、このように鎖につながれている。

パウロは、ローマの総督が自分の無罪を認め釈放しようとしたが、ユダヤ人たちから反対されたので皇帝に上訴したと言っている。事實は、総督がエルサレムで裁判を行おうとした、エルサレムで裁判を受ければ、怒り狂うユダヤ人たちの暗殺の手から逃れることはできないと判断し、上訴したのである。

イスラエルが希望していることはメシアの到来である。この希望は主イエスが十字架の死から復活したことにおいて実現した。主イエスの死者の復活を宣教したために鎖につながれていると、自らの無罪と使命について説得している。

パウロの話聞いたユダヤ人たちは、下記のように応じている。私たちは、あなたについて、公式、非公式にもエルサレムから何の書面も受け取っていない。ここに来た兄弟たちの誰一人あなたの悪いことを報告したことも、話したこともない。ただ、あなたから直接聞いてみたいことがある。あなたが宣べ伝えている「分派（イエス派）」について、至る所で反対があると耳にしているが、それは何故であるかを知りたい。パウロの宣教によって、ユダヤ人と異邦人の間に諍いが起こり、殊に、ユダヤ人のある人々は猛反撃をしていることを伝え聞いていた。その理由を問うている。